

The Winter's Tale の「明」「暗」

高橋 昭 三

- I はじめに
- II 「暗」—Leontes の嫉妬
 - (1) 嫉妬, その原因と悪意性
 - (2) Sin と Death
 - (3) Nothing の意義と Justice
- III 「明」
 - (1) Perdita の象徴性
 - (2) Hermione の Grace
 - (3) Autolycus の Humour
- IV おわりに

I はじめに

事物に具体的、象徴的理解がある。私達の目にとまる行為は具体的発露であり、心に感じることは抽象的なものと考えられる。いずれも内包的あるいは外包的にとらえる必要がでてくる。劇の登場人物を通して、ある意義を表わす時に、作家が無意識であったとしても何か深い要素を感じ取れることがある。事物の二面性—それは背中合せにあると思われる—を断定的判断で一方に推論することを恐れる。悲劇はときには喜劇にもなりうる。もっとも醜悪な澱の中で、溺れもがき、苦しみにうちのめされていたとしても当事者以外には実際の悲劇となりえないこともある。第三者がいかに過酷な姿に憐憫の情を示したとしても、同一とはなりえないから。そこに大きな障害が横たわっているとも考えられる。

「明」を人生の明るい面、希望であり、夢であり、心のふれ合いとする。「暗」を暗い面、悲しみであり、悪意であり、罪と考えてみる。全て行為となりうるし、心の中に感じられるものである。*The Winter's Tale* にはこの二面が交差し、ややもすれば混合に近い様相ではなく、可成り判然とそれらの動きをみることが出来る。戯曲構成は、初めの三幕と終りの二幕とはそれぞれ一篇の悲劇（暗）と喜劇（明）になっている。悲喜劇性からいえばその

関連性は稀薄に感じられる。しかし意識上、全体の流れは決して断絶してない。この二面の明確な動きの中に、種々問題が相対的に提起され、そして解決されている。したがってこの二面が大きな軸となり一つの骨格を構成して、次の時点にある別の二面をみせる。それは (1)場所として、Sicilia—Bohemia (2)時として、現在—16年後 (3)質として、嫉妬—許し、悪意—愛、死—生、等とみれる。

私達は、登場人物について幾分類型的にその特質を誇張し、ほとんどその特質の塊として考えがちである。Iago は邪悪そのもの、Brutus は高潔無比な人格者、Juliet は清純な愛の持主など。これらはあくまで一面的なものであろう。矛盾した思考、行為をするのが人間の常であれば、分類別に限定化することにいささか危険を感じる。‘Our bodies are our gardens to the which our will are gardeners.’ (Othello, I, ii, 323-4)「われわれの体は庭で、それにわれわれの意志は庭師だ」。類型別には最悪な Iago のこの言葉に複雑な人間模様的一端と、行為の本質の起因を瞥見できるようである。Hamlet が語る人間評価の言葉にも、私達が表面的にしか感知できない様な矛盾を皮相的に語っている。「人間は何んと素晴らしい造形物なのだ。理性はなんと気高いことよ。能力は限りなく、表現と感動はなんと明白で驚嘆に値いするもぞ。行動は天使のごとく、理解力は神の如し。人間のいかに美しいこと。万物の霊長。」(Hamlet, II, ii, 315-20)

この劇の登場人物は二面（明暗）を劇構成と同様に比較的明確に表わしている。したがってこの二様相の織りなすものをとらえ、「暗」を人間悲劇の根源ともいえる嫉妬とし、「明」をそれに相対的な浄化するものと考えてみたい。

II 「暗」

(1) 嫉妬、その原因と悪意性

嫉妬 (Jealousy) を考える時、脳理をかすめることは Othello の悲劇であろう。Othello のテーマは嫉妬そして破局といえるから。しかし、Leontes のそれと比較すると何か異質なものを感ずる。Othello は Iago の極言すれば緑り人形としての要素を内在していたともいえる。そして Iago によってかきたてられた嫉妬ともいえる。The Winter's Tale には、Romantic Othello や Angelic Desdemona さらに Malicious Iago は存在しない。Othello にとって致命的な一枚のハンカチもない。あるものは意識、無意識にかかわら

ず、人間の本性として内在する嫉妬それだけである。過去、現在、未来へと確立され、また確立されようとしている一切の関係を破壊してしまうものである。そこには新生をもたらすものは何も介在しないし予見すらできない。

Leontes の嫉妬の要因として、A. Sewell は J. Stewart の同性愛であるというフロイダ的分析に異議を唱えている⁽¹⁾。彼は、この嫉妬は Leontes の心中の苦しみを、最愛の妻 Hermione や遠来の親友 Polixenes に対する墮落的投影であるといつて、「彼の罪を特殊化したり、また無分別になっていたかも知れない彼の心に、特別な方法で焦点をあわせることは、事物の均衡を変えたり、主要点を曲解することになる⁽²⁾」と説明している。しかし Leontes の心の動きと自己洞察を無視することはできない。心理劇でないからといって、心理動向を無視することは、個人ばかりでなく劇全体の動きをみる一つの要素を見失うことにならうかと考える。Hermione が Polixenes に愛情をいただいているという Leontes の口実には根拠がないとし、Hunter⁽³⁾ は Leontes が Hermione と Polixenes 二人の会話を立聞きし Hermione の言葉を誤解したとみている。J. Dover Wilson の考えに反対の立場を明らかにしている S. L. Bethell⁽⁴⁾ の見解を支持している。

嫉妬は愛情の一種の変形とも考えることができる。愛は時として変りうるものと Shakespeare が *King Lear* のフランス王に語らせている⁽⁵⁾。また *Cymbeline* の Posthumus が Iachimo のわずかな作為で Imogen に抱く愛が淡雪のように消え恐ろしい憎悪の虜となる。嘘、おべつか、だまし、淫慾、食欲すべて女性のものとして化してしまう。

Could I find out

The woman's part in me—for there's no motion

That tends to vice in man but I affirm

It is the woman's part.

(*Cymbeline*, II, v, 19-22)

愛から憎しみへ、嫉妬の恐ろしさである。Polixenes への Hermione の態度が余りにもやさしい為に Leontes の心に動揺が生じたのであろうか。しかし妻に対する愛、親友への友情は 'There is not in the world, either malice nor matter, to alter it...' (I, i, 31-2) と微動すらするものではなかったと思われる。Polixenes はすでに9カ月という長期滞在をしている。何か次第に彼の心に重くのしかかってきたのであろうか。妻はみごもっている。The first Lady が王子 Mamillius に新しい生命の誕生に喜びをもって語る。

The queen your mother round apace : we shall

Present our services to a fine new prince

One of these days, (II, i, 16-8)

恐ろしい想像が Leontes の脳裡をかすめたのであろう。老友が感謝をこめて 'We thank you' (I, ii, 8) と謝辞を述べると、

Stay your thanks a while

And pay them when you part. (I, ii, 9-10)

と何か不気味にさえ感ずる返事をしている。D. Wilson はこれについて、'The problem of this scene is to determine at what point Leontes first becomes jealous.'⁽⁶⁾ と註解し、さらに「もっと逗留するよう誘いかけるのはただ単に確認をえようとする嫉妬のなせるわざ」と説明している。既にここにおいて、Leontes は Polixenes と Hermione との間に疑念をもってきたと思われる。实际的信憑のない根拠による嫉妬、同性愛や愛の変形でもない嫉妬の始りではないだろうか。妻が親友に話しかけることそれ自体が、すでに嫉妬の根にもなろう。また、親友と自負する自分の求めに応じなかった 'At my request he would not...' (I, ii, 87) Polixenes が Hermione の歓待と誘いを心よく受入れたことが彼の僻となり、

Too hot, too hot:

To mingle friendship far, is mingling bloods.

I have tremor cordis on me : my heart dances,

But not for joy; not joy... (I, ii, 108-11)

といわせるのであろう。本質的問題とはまったくかけはなれた面子の問題で。

これに反して Othello は、Iago の Cassio と Desdimona の関係についての悪意にみちた中傷に対して疑問をもち、心の中で極力否定しようと努める。

What sense had I of her stol'n hours of lust?

I saw't not, thought it not, it harm'd not me:

I slept the next night well, was free and merry;

I found not Cassio's kisses on her lips:

(Othello, III, iii, 338-41)

ここに Othello の冷静な姿をみる。ところが Leontes にはささいな事から生じた嫉妬と憎悪に類するようなものが、心の葛藤の中で混合している様に思える⁽⁷⁾。妻の歓待態度は 'that is entertainment My bosom likes not' (I, ii,

117-8) である。したがって渦中に糸をたらしめて模索する釣師のごとき態度すらとる。Hermione の行動は真実なものでなく、Leontes にとって仮空の偽りにすぎないものとなる。それはあたかも芝居、夫を欺く芝居 'Thy mother plays' (I, ii, 187) と考える。忠実な Camillo の諫言にも耳をかす余裕すらなくなる。猜疑心の毒血はすでに Leontes の全身をかけめぐり、Polixenes の暗殺を画し Camillo にその実行を強いる。王の邪悪に苦しみ Camillo は Polixenes とともに Bohemia に逃れ、それを知らされた Leontes は妻と友への疑念の的中と事実が確認されたとして苦悶の深淵にたつ。小船が大浪に翻弄され遂には巧ち果てていくように、悶き、のた打ち、絶叫する。嫉妬の戦慄すべき極美感とすら思える程である。

How blest am I

In my just censure! in my true opinion!

Alack, for lesser knowledge! how accused,

In being so blest! There may be in the cup

A spider steeped, and one may drink, depart,

And yet partake no venom (for his knowledge

Is not infected): but if one present

Th'abhorred ingredient to his eye, make known

How he hath drunk, he cracks his gorge, his sides,

With violent hefts: I have drunk, and seen the spider....

(II, i, 36-45)

Leontes は錯乱に近いといえるし、嫉妬は憎悪に近いものとなる。彼は全てを裏切られたと信ずる。心に秘む悪意の芽が、悪魔が摩く刃の様にとぎすまされ、彼の鬱気にはころび花を咲せ始める。しかし疑うこと、嫉妬することから何か良い秩序が生れるとは期待できない⁽⁸⁾。あるものは秩序の破壊であり、破滅である。妻と友への猜疑と不信を抱き始めた頃、すでに悪意と憎悪が彼の心をむしばんでいたのであろう。子供に向い 'Mamillius, Art thou my boy?' (I, ii, 120) と問いかける時、もはや正常な状態の人間とは考えられない。

Thou want'st a rough pash and shoots that I have,

To be full like me: yet they say we are

Almost as like as eggs;

(I, ii, 128-30)

妻 Hermione の貞淑に疑念がある以上、新しい生命にも悪意に満ちた思い

をもつのも極く自然なのかも知れない。奈落に突落されて暗黒が自分のものである様に、Leontes を取囲むものはすべて暗黒で、自己意識すら存在しなくなり始めているかのようである。

and let her sport herself

With that she's big with—for 'tis Polixenes

Has made thee swell thus.

(II, i, 60-2)

呪とも思える暴言である。否定することが肯定への道であり、Hermione は一個の憎悪の対象と化してしまう。その上、自己の否定ともなり破滅へと進む。現在はもちろんのこと、過去、未来は断絶しまったく空虚なものとなる。「ここに展開されているのは、人間の生の姿である。それは無意識のうちにされる心の幻想であり、またそれが生み出す感情的な激情でもある⁽⁹⁾。」

Posthumus が自分の誤解から嫉妬に狂い、絶望にうちのめされて嫌悪するもの (vice) はすべて女性の責に負わせる。それは嫉妬から転じて女性という器そのものへの猜疑となり、恐るべき苦悶となる⁽¹⁰⁾。しかし Leontes の感情はそれを遙かに超越している。自省はみられず、人間性喪失の状態ともいえる。悪意に満ちた思考、行為は悪意ではなく裏切者に対する当然の返礼という考えである⁽¹¹⁾。復讐がすべてであり、それが最大の武器で自己保身の健全な方法と思えてくる。遂に王子 Mamillius を疑い、侮辱する人間となる (I, ii, 325-333)。Hermione はすでに最愛の妻ではなく、姦婦である。その考えは彼の心を益々むしばみ、地獄の責苦以上のものとなる。

but she

I can hook to me : say that she were gone,

Given to the fire, a moiety of my rest

Might come to me again...

(II, iii, 6-9)

信実是不実、肯定は否定と変り、人すべて偽満者としてうつる。Apollo の神話ですら受けいれる余裕をなくし、偽りと叫ぶ。嫉妬というより随落した嫉妬ともいえよう。Othello の嫉妬と比べてみるに、Leontes のその質は複雑である。誇り、激情、性格の脆さなどが、麻糸のみだれの様に織りなしている。その上、悪意性としては、Macbeth の陰険さより甚だしいものであろう。Emilia が、Othello には嫉妬の原因となる様なことは何一つしていないという Desdemona に、嫉妬というものの危険性を説いている。

But jealous souls will not be answer'd so;

They are not ever jealous for the cause,

But jealous for they are jealous : 'tis a monster

Begot upon itself, born on itself. (Othello, III, iv, 159-62)

嫉妬にはその原因とすべきものを必要としないですむ。嫉妬のための嫉妬、明確な原因のない嫉妬—人間の心の奥底にひそむ恐るべき怪物—それはわれわれ人間の宿命的な所有物なのであろうか。Shakespeare が Leontes の嫉妬のなかで何かそれを暗示している様に思える。

(2) Sin と Death

Leontes には罪意識があるだろうか。猜疑心にみち嫉妬に狂っている彼から謙讓な行為、姿勢を感じとることはできない。第一段階として、'Unjustifiable sexual jealousy is only the first of Leontes' sins'⁽¹²⁾ と考えられよう。けれども 'sin against love'⁽¹³⁾ の方がより適切な見方の様に思える。愛、誠実、信実に対する偏見と裏切りが彼の心にとどまっている。それは彼の心の変化でもある。親友を迎えた時、彼の心に画きだされた追憶は、穢のない可愛い小羊であった。しかし、あたかも自分自身は全てを熟知しているかの様ではあるが、無意識のうちに彼の心は蝕まれていく。彼は悶き苦しみ心の動揺をしめすが、かえって冷静さを思はせる言葉をはく。

Physic for't there's none:

It is a bawdy planet, that will strike

Where 'tis predominant, and 'tis powerful...think it...

From east, west, north, and south! be it concluded,

No barricado for a belly...know't,

It will let in and out the enemy,

With bag and baggage...many thousand on's

Have the disease, and feel't not...

(I, ii, 200-7)

害毒はすでに彼の全身を覆い、彼自身が中傷者に落ちこんでいく。嫉妬の渦の中に身を沈め、もがけばもがく程自縄を強めていく。忠実な Camillo に罪の深さを忠告されるが、一瞥すらあたえない。

'shrew my heart,

You never spoke what did become you less

Than this; which to reiterate, were sin

As deep as that, though true.

(I, ii, 281-4)

「たとえ真実であったとしても」という Camillo は Leontes の心の迷いははっきり見通している。かえって Camillo 自身が罪の深さに恐れおの

いていることが理解できる。人間に対してのみばかりでなく、真実と正義にも悪意ある嫉妬—それは crime でなく sin—を Leontes が犯しているからであろう⁽¹⁴⁾。彼を取り囲む者は忠実で、暗夜の一灯ほどに価値あるものなのだが、彼の眼中には写らない。彼の sin は次第に crime—行為と移り始める。

The Tempest で Ariel が Alonso 達に 'You are three men of sin' と厳しい言葉で罪の償い、そして罪びとの行末を暗示する。

You are three men of sin, whom destiny,
That hath to instrument this lower world
And what is in't, the never-surfeited sea
Hath caused to belch up you; and on this island,
Where man doth not inhabit, you 'mongst men
Being most unfit to live. I have made you mad;
And even with such-like valour men hang and drown
Their proper selves: (The Tempest, III, iii, 54-60)

これは後期三部作の倫理的要素をしめているものと考えられる。Ariel の言葉の様に、結果的には死よりも恐ろしい破滅が、罪を犯した人間に一步一步近づていく。しかし死による罪の贖いを求めなくなっている。悲劇からの脱出は自己改造にあることを示唆している。

Leontes は現在からの脱出を死で表わそうとしている。これは Othello の自己抹殺による断絶方法や、他に避難所を求め狂気の世界に没入して悶絶する Lear の型でもない。The Winter's Tale の主題ともいえる死と生の流れの中で行なわれる。それ故に、思考は悪意にみち行為は残忍にみえるが、それは「明」「暗」の接点としての一役割をもっている為であろう⁽¹⁵⁾。それは Leontes が自分以外の者に要求する死と惨酷な殺意の実行にある。嫉妬に苦しむ Othello もその過程においては例外とはいえないが、Leontes の言葉を通して見て、彼の無慈悲、無情の激しさをしる⁽¹⁶⁾。これは現実の世界を自から疎外し、彼にとって死を意味するものとなる。嫉妬心が台頭しはじめた頃からすでにこの状態があらわれている。

were my wife's liver

Infected as her life, she would not live

The running of one glass. (I, ii, 304-6)

新しい生命の誕生は彼の憂いである。Antigonus に火にくべてしまえと残

忍そのものの行為を命ずる。

If thou refuse,
And wilt encounter with my wrath, say so;
The bastard brains with these my proper hands
Shall I dash out. Go, take it to the fire, (II, iii, 138-41)

Othello の悶々と苦しむ姿と比べることすらできない。また、Posthumus が嫉妬の慮となり、そこから脱れんとして死を考えることも似ていない。死は苦痛を取り除く鍵であり、聖なるものに近づく一手段でもあった。

Yet am I better
Than one that's sick o'th'gout, since he had rather
Groan so in perpetuity than be cured
By th'sure physician, death, who is the key
T'unbar these locks. (Cymbeline, V, iv, 4-8)

Leontes が悲劇からのがれ、罪から自由をえる為の避難所への道は、Othello や Posthumus の歩む道と同じではなかった。苦しみの葛藤の中で、彼はすでに死の状態であったといえよう。行動は外部に向けられていたとしても、彼の心はすでに虚構の中で自滅しはじめていたものと考えられる。罪と死からの脱出、自由を掌中にするには、悪意ある嫉妬により死へおいやった Hermione の再生以外にはない。抹殺したものからの救を求めるより外に道はなかった。

(3) Nothing の意義と Justice

Leontes の Nothing と Justice の二概念にある種の特徴をみることができる。Nothing—無，虚無，無価値なものと考えられる。Leontes はこの意味を体験的に実感している。悲劇は、現実と理想の相違、理想の精神が現実に一致しないことから起りうるものでもあろう。しかし彼の悲劇は現実と理想の不一致からではなく、現実の世界での現実の否定、そして信頼の否定からおきたものである。すなわち nothing から発したものとも考えられる。そしてこの nothing から something への移行が、もし信頼の否定とか、疑念、嫉妬を基礎としていれば、そこには something malicious—悪意ある何物しか生れてこないであろう。Leontes の nothing のもつ意義がここにあると考える。猜疑、嫉妬、憎悪そして独善的なまでの尊大さ、この姿が彼のものである。‘The whole of Leontes’ behaviour has now become a frenzied building up of supposed certainties on ‘nothing’, on the baselessness of an irrational

emotion followed to the limits of self-centred impulse.⁽¹⁷⁾

Leontes は妻のささいな振舞、態度に鋭敏な反応を示し、誤解の種を心に植えつけていく。夫婦の根本的な絆、愛情の片憐さえみられなくなる。

Is whispering nothing?

Is leaning cheek to cheek? is meeting noses?

Kissing with inside lips? (I, ii, 284-6)

Camillo に妻の行為の不貞節をなじる。非現実的なものを自問自答し、それを現実的肯定として確認させているのであろう。激情は益々燃えさかり、錯乱の中に二者択一を自からせまる。結局、非現実を現実（無を有としてとらえる）とし、そこで無の最悪の点まで自己崩壊していく。Leontes は妻の行為を「これが何でもなければ」と思う。

Is this nothing?

Why then the world, and all that's in't, is nothing,

The covering she is nothing, Bohemia nothing,

My wife is nothing, nor nothing have these nothing,

If this be nothing. (I, ii, 292-6)

彼のこの無から有に転ずる過程に、嫉妬の悪魔的な破壊の精神がみられる。自然の法の動し難い法則にあえて逆行し、それを葬ろうとしている。Nature の世界から malice の世界への変化と考えられる。Polixenes が Leontes の疑念を晴す努力を願った時、Camillo は

you may as well

Forbid the sea for to obey the moon, (I, ii, 426-7)

と諭す言葉に、自然に逆う姿がいかに無益で恐ろしい事かをしる。自然に対しても、Leontes はこの逆行を行いつつある。彼は、彼独自の論理により、この自然の動きに逆行することが逆行であると理解できないでいる。

Affection! thy intention stabs the centre:

Thou dost make possible things not so held,

Communicat'st with dreams—how can this be?—

With what's unreal thou coactive art,

And fellow'st nothing: (I, ii, 138-42)

この様な無から有への転移、また秩序から混乱した無秩序への変化の中に、真の愛情が存在すると考えることは困難であろう。言語上の愛であって、空虚なものにすぎない。彼にとって、現在の世界が非現実化している以

上、もっとも美しいとされる愛の世界は無の世界に存在しえない。彼の人生は現段階において、虚無という無限の大海にうかぶ孤島⁽¹⁸⁾であり、その範囲の中での苦悶である。そこからの脱出は不可能となり、また不可能化する為に自縛を強めていく。Paulina が Leontes を責め指適するように、「絶望だけ」(III, ii, 209) が彼の身にふりかかる様になる。それが nothing から something へ移った Leontes の唯一のものとなる。彼は、嫉妬心からおきるもっとも悪意的な行為の発露しか伝承できない存在となつた。そして彼は Apollo の神託をも否定する段階に到してしまう。Leontes は 'nothing of a man' (Othello, IV, i, 90) と化してしまう。彼の嫉妬そのものが 'weak-hing'd fancy' (II, iii, 119) からでている以上、nothing から something を作り出す要素は悪意的で、必然的に空中楼阁にすぎないであろう。一陣の突風で崩壊することは自明の理である。

どんな人間でも、自己主張を裏付ける為に何か強力な武器を必要とする。猜疑心、嫉妬心から生ずる様々な問題に対して、ただ無防備に自己主張するのみでは、嫉妬の原因となるものを自ら覆す恐れがでてくる。したがってそれなりの論拠とか確証をもち、正当化する必要がせまられてくる。そうすることにより、自己の正しさを認識し、不正義な行為一姦通とか不貞節一を責められる。この不正義に対して、被害者と自認する側が正義を基盤として対応することで、一種の高尚な態度を表わしているという自負がでてくる。Othello にはハンカチという確証がある。毒薬より寝床の中で絞殺した方が良策と Iago に教唆された時、Othello は因果応報であるとして自己の行為の正当性を自認する。

Good, good: the justice of it pleases: very good.

(Othello, IV, i, 222-3)

そして Desdemona が安らかな寝息をかいているのをみて、

Ah, balmy breath, that dost almost persuade

Justice to break her sword!

(V, ii, 16-7)

と嘆息する。彼は嫉妬心に燃えているものの、基本道徳の一つである正義を遂行することが当然と自覚している。Leontes はどうであろうか。彼の支柱も justice にある。しかし Othello とは同一でない。Leontes にとって、正義は頼みの綱の様なものである。嫉妬の原因を確認し、妻にその事実を認めさせ、対外的に不貞節と不信義を公認させることにある。復讐心に燃る彼は、仮空の正義で正義の為と称し、妻 Hermione の公判を命ずる。

as she hath

Been publicly accused, so shall she have

A just and open trial.

(II, iii, 203-5)

しかしこの裁判に対して、Antigonus が Leontes に諫言し、隠された意中を喝破してしまう。

Be certain what you do, sir, lest your justice

Prove violence,

(II, i, 127-8)

Leontes の主張が例えどんなものであろうとも、彼の正義には二つの意味がある。先づ第一に、暴君でもなく怒り狂った夫でもないということ。それ故、嫉妬に狂乱し妻を抹殺するのではなく、不本意ながら正義の為に公判をもつということである。

Let us be cleared

Of being tyrannous, since we so openly

Proceed in justice, which shall have due course,

Even to the guilt or the purgation...

(III, ii, 4-7)

したがって妻は夫の正しさを感じると思えるべきだと思っている ‘*thou shalt feel our justice*’。(III, ii, 90) 第二に、人間の以外の超自然の力—神も御昭覧あることである。それは Apollo の神託をうけ、人間力を超えた世界で妻を糾弾することにある。神託をうけることは、真偽を見分ける為というより寧ろ自分のために利用することに随落する。公判と神託、これが Leontes の支柱ともいえる正義の正体である。

悪意に満ちた嫉妬に盲目となった Leontes は、Apollo の神託が予期に反し、妻の無実を証明してもその真実を直視できなくなっていた。彼にとって有利でないものは正義ではない。Apollo の神よりも上位にあることを暗に自負し、遂に神託を偽じない人間と化してしまう。不正義をありのままに認めない時、もっとも悲しむべき状態が現われる。彼は Apollo の怒りにふれた。王子は急死し、妻は悶絶する。ここにおいて始めて、Leontes は正義と自認してきた一連の事柄を不正義と悟とる。

Apollo's angry, and the heavens themselves

Do strike at my injustice.

(III, ii, 145-6)

彼はこれ以後、a man of power から a man of humility に、真の意味での nothing から something へ、そしてまた、injustice から justice へ移っていく。心から誠実を自覚することのいかに困難であるかをする。それは Leontes

ばかりでなく、常に私達に求められている問題ではなかるうか。

It is required

You do awake your faith:

(V, iii, 94-5)

註

- (1) Arthur Sewell: *Character and Society in Shakespeare* (Oxford University Press, London), 1951, p. 6.

'Mr. Stewart... following an analysis by Freud, interprets Leontes' jealousy in *The Winters' Tale* as the projection upon Hermione of those homosexual desires which were awakened in him by Polixenes' actual presence for the first time since 'their twyn'd' boyhood.'

- (2) A. Sewell: *ibid*, p. 8.

- (3) R. G. Hunter: *Shakespeare and the Comedy of Forgiveness* (Columbia University Press, New York and London), 1965, p. 256.

これは D. J. Wilson 編集の Cambridge 版で、Hermione が Polixenes に滞在を続けるよう説得する場面 (I, ii, 80-86) のことばを指す。特に82と83行間の [*Leontes comes softly forward from behind, unseen*] というト書後の4行についてである。

Th' offences we have made you do we'll answer,
If you first sinned with us; and that with us
You did continue fault; and that you slipped not
With any, but with us.

Wilson の注解は次のごとし。'Is it not more than probable that Leontes is intended by Shakespeare to overhear these equivocal words as he comes forward from behind, unseen by the speakers but in such a way that the audience can watch the play of his features?' (*The Winter's Tale*, p. 133.)

これに対し Hunter は 'Such ingenuities will not work on-stage.' としてその理由を 'If an actor is to convey to us the fact that he is spying, he must distract our attention from what is spying upon. But if he so distracts us, we do overhear what he overhears, so the significance of his overhearing is entirely lost. If such business is to work, the actor must tell us what he has overheard and what he makes of it.' ちなみに Horace Howard Furness 編の *The Winter's Tale* (A New Variorum Edition of Shakespeare) には 'unseen' のト書はない。

- (4) S. L. Bethell: *The Winter's Tale: A Study*, (London,) 1947, pp. 121-122.

- (5) Love's not love

When it is mingled with regards that stand

Alloof from th' entire point.

(*King Lear*, I, i, 241-3)

- (6) A. Quiller-Couch and J. Dover Wilson, ed.: *The Winter's Tale* (Cambridge University Press), 1959, p. 131.

- (7) S. T. Coleridge: *Shakespeare Criticism 1623-1840* (World's Classic), (Oxford University Press, London), p. 269.

Coleridge は Leontes の嫉妬の始まりを I, ii, 87 と指摘し、Othello と Leontes の差を次のようにいう。'We shall immediately feel the fundamental

The Winter's Tale の「明」「暗」

difference between the solemn agency of the noble Moor, and the wretched fishing jealousies of Leontes, and the morbid suspiciousness of Leontes,...

- (8) Stopford A. Brooke: *On Ten Plays of Shakespeare* (Constable and Company Ltd., London) 1954, p. 258.

'Jealousy is always subject to foul thoughts, and it pleases its anger to express them with the savage grossness Leontes uses.'

- (9) Harold C. Goddard: *The Meaning of Shakespeare* Vol. II (The University of Chicago Press, Chicago & London), p. 266. 彼はさらに続けて Leontes の状態を評し 'Leontes' mind is like a fiery furnace at such a temperature that everything introduced into it—combustible or not—becomes fuel.'

- (10) Posthumus の独白にみられるのは女性への呪いと憎悪である。最愛なものが最も嫌悪した対象となる。そして悪の根源を女性とみなしている。

Could I find out

The women's part in me—for there's no motion

That tends to vice in man but I affirm

It is the woman's part; be it lying, note it,

The woman's flattering, hers; deceiving, hers;

Lust and rank thoughts, hers; revenges, hers;

Ambitions, covetings, change of prides, disdain,

Nice longing, slanders, mutability,

All faults that man may name, nay that hell knows,

Why, hers, in part or all, but rather all; (*Cymbeline*, II, v, 19-28)

- (11) S. A. Brooke: *op. cit.*, p. 258.

- (12) Wolfgang J. Weiglart: *Shakespeare Psychognostic* (The Hokuseido Press, Tokyo), 1952, p. 71.

- (13) R. G. Hunter: *op. cit.*, p. 191.

- (14) G. Wilson Knight: *The Crown of Life* (Methuen, London), 1952, p. 79.

'His suspicion is an ugly thing, itself an evil; it is, practically, sin.'

- (15) Derek Traversi: *Shakespeare The Last Phase* (Hollis & Carter, London), 1965, p. 160.

'Thus uniting the idea of birth and death in a single episode, and connecting the tragic past with the happy future in an anticipation of the final reconciliation.'

- (16) E. M. W. Tillyard: *Shakespeare's Last Plays* (Chatto and Windus, London), 1954, p. 76.

- (17) D. Traversi: *op. cit.*, p. 117.

- (18) W. J. Weiglart: *op. cit.*, p. 10.

III 「明」

(1) Perdita の象徴性

「明」を表わす価値内容と存在性をみるに、Hermione より Perdita により高い象徴性をみる。Perdita⁽¹⁸⁾ という名前からして、この劇が表わす最も

重要な主題の一つである死と生、嫉妬と愛という明暗二面性を内包している⁽²⁰⁾。乗船が嵐に翻弄されたのち、海辺に放置されたその瞬間に Perdita は世にでた。Leontes の嫉妬、憎悪、絶望の表象でもある彼女は、羊飼いに拾われることによって新生となる。羊飼いが Clown に赤児をみせていう。

Now bless thyself; thou met'st with things
dying, I wish things new-born. (III, iii, 108-9)

Perdita はここで死から生へと解放されたのである。彼女が「暗」の肉体的束縛からの解放（すなわち霊的に自由になる）を示すものと考えられる。死と生を一つの出来事の中に結合することは、悲劇的狀態を豊かな未来へと結びつける意義を感じとれる。

Perdita が存在する世界は、未見の世界の現実の様相か、または現実世界の未見の様相を示している。これは彼女自身の中に、明白でもあり、また目でとらえにくい相対的な要素を隠し持っていることを意味する。この種の矛盾は人生にまますることであり、決して混乱が起るほどのものではない。邪悪に包まれて誕生したにもかかわらず清純そのもので、染み汚れたものをなにつつ内在していない。Perdita の愛と清純は千天の慈雨以上の恵みと豊さを周囲の人々にもたらす。

the most peerless piece of earth, I think,
That e'er the sun bright on. (V, i, 94-5)

Perdita の愛は Miranda と対照的で、決して innocent love ではない。むしろ理知的ですらある。Leontes のかつての親友で、現在は不仲である Polixenes の王子 Florizel が恋人であるが、Juliet のように不運な星の下に生まれた恋人の悲劇性もない。彼女の恋は決して悲劇的ではなく、未来を予見しうる明るいものといえる。Florizel は王子、Perdita は羊飼いの娘と相互に意識している。しかし彼女は地位にとらわれず、自分の愛に対して確固たる思想をもっている。

No more than, were I painted, I would wish
This youth should say 'twere well; and only therefore
Desire to breed by me... (IV, iv, 101-3)

Perdita は偽りを好まない。心の柔和な者は虚偽で真実をとらえようとしない。自然の美をそのまま受けとめる。変想して訪ねてきた Polixenes と Camillo に冬の花を捧げる。しかし彼女がその花を嫌いであることに不審をいただいた Polixenes が理由を尋ねると、

For I have heard it said

There is an art which in their piedness shares

With great creating Nature.

(IV, iv, 85-7)

と答える。Nature そのままの美を把握することにある。

Perdita の言葉は詩そのままですらある。詩は浪漫的で高尚にする。彼女の人間と自然の美を語るそのなかに Shakespeare の偉大な自然に対する愛情を知ることができる。田園生活の描写は読者をその環境の中へ知らずうち引きづりこんでしまう。簡素ながらも優美に春の花を話しかけてくる。

daffodils,

That come before the swallow dares, and take

The winds of March with beauty; violets (dim,

But sweeter than the lids of Juno's eyes

Or Cytherea's breath); pale primroses,

That die unmarried, ere they can behold

Bright Phoebus in his strength (a malady

Most incident to maids); bold oxlips and

The crown imperial; lilies of all kinds,

The flower-de-luce being one!

(IV, iv, 118-127)

‘No shepherdess but Flora’ と Perdita の美と野性的ながらも生来の優しさに感動し讚美する Florizel は、

my desires

Run not before mine honour; nor my lusts

Burn hotter than my faith.

(IV, iv, 33-5)

と誓言する。それは「彼女の動きの中に、秩序ある律動的な自然の流れ⁽¹¹⁾」を感じとったからであろう。

Perdita の誕生、美、愛、感覚、言葉、行動それぞれにたえず一つの表徴的意義を感じとれる。花のように優美で、また ‘Flora peering in April's front’ (V, iv, 2-3) とも例えられよう。Perdita には Marina や Imogen のような noble さであるとか、Miranda の innocent さはない。Polixenes との会話 (IV, iv, 79-103) の中で、Nature について論ずるときに感じさせる reasonable の面を強くうける。それが運命的なものに左右されずにいられたことの一因でもあろう。彼女はまた、未来を予見し楽しむことばかりか現実的に判断すらする。Perdita は暗黒の中にさす一条の希望の光ですらあ

る。絶望と悲惨な状態にいるとき、再生に必要な spirit でもある。E. E. Stoll は Perdita を次のようにとらえている。‘How characteristic the fancy is of Perdita, innocently familiar with the ways of ‘great creating nature’, sprightly and humorous, exquisite and tender !…she has more of both the knowledge and joy of life in her.’⁽²²⁾

(2) Hermione の Grace

「Hermione は現実の女性であり、Perdita はより象徴的である⁽²³⁾」と Tillyard は結論する。Hermione の生涯は茨を逆茂木したようなものといえる。夫の猜疑心から端を発し、王子と王女を失なう。そして16年間の隠れた生活、このような苦難にもかかわらず、彼女は悲劇的結末に導かれることもなく、私たちの心にたえず希望の灯をてらしてくれる。なにがそうさせるのであろうか。それは Hermione の Grace によるものと考える。

My last good deed was to entreat his stay;

What was my first? it has an elder sister,

Or I mistake you: O, would her name were Grace!

(I, ii, 97-9)

夫に忠実であることが、彼女の目的であり喜びでもある。これは Hermione の質的要素であると同時に、それ故 Leontes の悪意ある嫉妬を益々強めていくものでもあった。一方的な断絶によって愛は奪われる。第二の喜び、王子 Mamillius と第三の慰め、Perdita も失なう過酷な責苦にも ‘with eyes of pity, not revenge’ (III, ii, 121) で見てほしいと願う。自尊心のない尊厳、激情のない愛情、脆さのない柔和⁽²⁴⁾を示す。人間が求めてやまぬ高尚で象徴的な姿としか思えぬほどの態度であらう。

this action I now go on

Is for my better grace…

(II, i, 121-2)

自己の理念の完全無欠を確信し、苦痛のうちにも靈的受容の感覚を慎重に力説している⁽²⁵⁾といえよう。

16年後の Hermione は再生、寛容そして許しによって彼女の grace をさらに高める。歳月は過去を忘却させる特技をもっている。心を空疎にする悲惨な出来事すら、懐しい思い出と化してしまう。Hermione にとって、寒々とした16の冬も、身をこがす夏の訪れも常に過去と現在の繋りであって、決して断絶ではありえなかった。彼女の浄化された心は、これ故に魅力をもたらす。Paulina が押しとどめるのを Leontes がさえぎり、垂幕を開けようと

質的意義は空虚なものとなろう。彼のささやかな悪事の過程の中で、悪意を超えて善意的なものが、彼の歌と牧歌調の中に秘められている。Autolycusの歩む道が中道であるためであろう。

And when I wander here and there,
I then do most go right. (IV, iii, 17-8)

彼の idea を感じさせる言葉である。未来を予測したり、夢をいただくことを考えない。

for the life to come, I sleep out of the thought of it.
(IV, iii, 30)

現在時点の尊重に重点がある。完全に誤りとはいえないが、すべてを肯定することに抵抗を感じる。しかし、これはかならずしも Autolycus の野卑な未来への偏見だけではあるまい。A. Roffe⁽²⁶⁾ が指摘するように、少なくとも現在をふまえながら反省的思考がなされている、と考えられてよいであろう。言葉の中に、詩的感覚はそれほど感じられないし、また哲学的思考をもくみとれない。けれどもなにか身近なことと実感する。時として、苦しみも起るが、哀れみは感じとれない。言葉に甘えている風にすら思える。

I see Fortune

would not suffer me; (IV, iv, 821-2)

Autolycus は行商の無頼漢といえる存在ではない。もはや「ただ単なる顧客に媚る存在でなく彼の理念を自己の水準で具体化したもの⁽²⁷⁾」といえよう。

Autolycus は人生に対し高慢な態度をみせない。謙譲な態度、または一步遜った姿勢を感じる。自己の本性を露骨に提示することによって起る悲劇は枚挙につきない。Leontes はその代表的なものである。しかし自己洞察が正しい型で行なわれ、それを助けるものがあれば、正常な姿での豊かな対話も可能となろう。良く認識することにより、また畏敬の念をもって人間を知ることによって、心が真にふれ合うことができるであろう。

How blessed are we that are not simple men!
Yet Nature might have made me as these are;
Therefore I will not disdain. (IV, iv, 740-2)

Autolycus のこの言葉は羊飼いの親子にではなく、私たちに向けているときえ受けとれる。それとも Leontes を暗示しているのであろうか。Humour が一つの問題を提起していると考えられる。人間を良くみつめ、人間の謙遜な

態度を求めているとも解せる。しかし 'Humor, which is another guise for humility, has again complicated the moral issues'⁽²⁸⁾ であるならば、彼の humourこそ諷刺的なものでなく本質的に人間の姿を痛烈にえぐっているとさえ考えられる。Autolycus の水準で、忍耐、謙遜、希望そして勇気が人生に求められていることを知る。それ故に、Leontes の世界と Perdita, Hermione の世界をより現実的な世界に結合させる役割を果たしている。

註

(19)

for the babe

Is counted lost for ever, Perdita

I prithee call't...

(III, iii, 32-4)

Leontes に赤児を遺棄するように命じられた Antigonus の夢枕に立った Hermione の願いの言葉。

(20) D. Traversi: *op. cit.*, p. 125.

Traversi は 'The Winter's Tale' の主題の一つの最初の宣言として II, ii, 58-63 を引用している。これは Paulina が新生児を連れだすことを、獄吏が拒否するときの言葉である。

You need not fear it, sir:

This child was prisoner to the womb, and is

By law and process of great nature thence

Freed and enfranchised—not a party to

The anger of the king, nor guilty of

(If any be) the trespass of the queen.

(イタリック体は筆者)

新生が過去の邪悪を浄化する役目を持ち、虞から解放への新時代を礎く意味が つつまれているのを感じる。暗から明への移行である。

(21) Caroline F. E. Spurgeon: *Shakespeare's Imagery* (Cambridge University Press, Cambridge), 1958, p. 308.

(22) Elmer Edgar Stoll: *Shakespeare's Young Lovers* (Oxford University Press, New York), 1937, p. 102.

(23) E. M. W. Tillyard: *op. cit.*, p. 35.

(24) *The Winter's Tale*, A New Variorum Edition of Shakespeare, H. H. Furness ed., (Dover Publication, Inc., New York), p. 360.

(25) D. Traversi: *op. cit.*, p. 123.

(26) *The Winter's Tale*, A New Variorum Edition of Shakespeare, *op. cit.*, p. 371.

'Now with regard to Autolycus, strong presumption arises, that Shakespeare intended to imply that this 'thought' of the 'life to come' did occasionally visit the mind of the reflective Pedlar in such a way that he could not so comfortably 'sleep out the thought of it'.

(27) H. C. Goddard: *op. cit.*, p. 275.

(28) Donald A. Stauffer: *Shakespeare's World of Images*, (Indiana University Press, Bloomington), 1966, p. 300.

IV おわりに

「明」「暗」二様相が画く世界を偶意的に考察すると、人間の心的活動といえる。罪と許しは絶ず心中で交差し、あるいは牽制しあう。悲劇は均衡が破綻することにより益々悲劇化していく。Leontes の世界は、人間の低俗で卑劣な面をみせている。心の罪の戯曲化といわれるのも当然であろう⁽²⁹⁾。Leontes の嫉妬は自尊と激情、想像と嫉妬の素地群が混然といりくんだものといえる。それは誰れもの心中に、たとえ無意識のうちであろうとも存在している。「悲劇的人物の変化は、ただ単なる心理的变化ではない。道徳的变化、発心、想像の変化である⁽³⁰⁾」と Sewell は説明する。Leontes の場合、人間を超越した力によらざるをえないのは、人間の本性による悲劇に端を発しているからである。

Perdita と Hermione の世界は人間の善をみせている。愛は限りなく、朽ちることはない。

I think affliction may subdue the cheek,
But not take in the mind. (IV, iv, 573-4)

この言葉は、Camillo が苦しみは心も愛の絆も変えるもの (IV, iv, 570-3) と言われたときの Perdita の返事である。死以上の責苦に慟哭した Hermione は、復讐にかりたてられることもなく、終局的に寛容と許しをもたらす。彼女の再生がそれを象徴する。再生は善の息吹きであり、悪を超越する。邪悪を一掃し、真の平和をもたらす。そこに少なくとも宗教的な高尚性がみられる。

悲劇から喜劇への移行に Time が一つの役割を果たしている。

I that please some, try all: both joy and terror
Of good and bad, that make and unfold error, (IV, iv, 1-2)

「時」は幸福と悲惨を運んでくる。そしてその流れは、過去の罪ある心を癒すこともあれば、悔悟の虜にすらする。16年の歳月は、すべてを過去に流すと同時にすべてを新しくする。「暗」から「明」の世界へと滑りぬけ、二つの世界を私たちの目前にその全容をみせる。そして陰惨な過去であればあるほど、より豊かな現在を体験する機会を与える。

If ever you have spent time worse ere now;
If never, yet that Time himself doth say
He wishes earnestly you never may. (IV, iv, 30-2)

Time は現実的であるが、抽象へさらに象徴化していくことも可能である。ここでは、Time は現実と象徴の混同をさけ、真実として登場している。そして試練にしたがう人間の心の要素ともなっている。

Autolycus は、Time の process の証しでなく、現実的側面の事実をとらえ解決の糸口を与える。彼は単なる諷刺や皮肉で終止することなく、人生の矛盾、象徴と現実を人間共通の美点であり弱点であると眺める。G. W. Knight は Autolycus の humour を 'Richest humour offers a recognition of some happy universal resulting from the carefree stripping away of cherished values'⁽³¹⁾ と評している。Autolycus が「明」の一つの part であることの証左である。

The Winte's Tale で、二つの世界が事物の相対性を示し、人間の内的問題を追求していることを理解する。さらにこの劇が暗示する要素は「幻想と想像、心の迷いと信念の差異⁽³²⁾」でもある。作者が明暗二様相を、劇構成と共通して示す理由もここにある。究極的には人間の探究であり、人間への警告でもある。自縛する者を解放せしめようとする人間性復活が、いかに至難であること、また可能であることをしる。罪と正義、生と死、悔悟と愛が最大の主題であることの意義をこの一篇を通して理解する。*The Winter's Tale* は *Cymbeline* の質的要素を簡潔に分離したものと考えられる。嫉妬と貞節の二大要素が *Cymbeline*, *Imogen*, *Posthumus* によって画かれている。そして終局的発展として、Prospero が支配する島で彼の Supernatural Art により、悪に対し悔悟と許し（寛容の精神）を *The Tempest* の中で与えられている。人間の悪は偶意の出来事であり決して人間本性の根源ではないとする一致点がみられる⁽³³⁾。また 'Being all-inclusive and doing justice to what it includes, *The Winter's Tale* stands by itself, a microcosm...'⁽³⁴⁾ と Tillyard が説明するように、この劇の表わす世界が独自に、そして三部作の関連性の中で存在していることに気づく。私たちの内面にたえず存在する二面性、それは宿命的というよりはむしろ人間であるが故に存在するものであろう。Shakespeare がこの明暗二様相を、愛憎の肯定的また否定的行為や期待、豊かに保とうとする愛の力また破壊しようとする悪魔的な力—極言すれば生と死のたたかいとして与えているとも受け取れる。人間の深窓問題を追求する厳しい態度の表われである。

註

(29) R. J. Hunter : *op. cit.*, p. 186.

The Winter's Tale の「明」|「暗」

'Shakespeare's dramatization of the sin of his *humanum genus* figure.'

- (30) A. Sewell : *op. cit.*, p. 83.
- (31) G. Wilson Knight : *op. cit.*, p. 100.
- (32) H. C. Goddard : *op. cit.*, p. 266.
- (33) David Daiches : *A Critical History of English Literature*, Vol. I (Secker and Warburg, London), 1960, p. 296. 'Cymbeline, *The Winter's Tale* and *The Tempest* all deal with evil and innocent, guilt and starting life afresh!'
- (34) E. M. W. Tillyard : *op. cit.*, p. 85.

The latter half (5-8) is devoted to the study of images of the Jewish relationship to the Christian world. Representations of the Jews' sufferings, of their exiles, of Shapiro's views of Christian churches, and of his social criticism are taken up.

Death and Life of *The Red Pony*

Ikuzo TANAKA

Studying Steinbeck's works which were written in California, we detect one major motif: glorification of life. To study his view of life, I have selected *The Red Pony*, which, I think, indicates the motif most simply and clearly. *The Red Pony* consists of four stories. Each of them has its own theme and together they make up one design. I have tried to see each theme and the relationships.

Two Aspects of *The Winter's Tale*

Shozo TAKAHASHI

There are two aspects in life. One is the aspect of darkness and the other brightness. In this play, these are well matched and each individually developed in the various experiences of life.

Leontes' jealousy, representing the greatest problem of the human mind, shows the aspect of darkness. In his malice, we find some much significance, such as Sin and Death, and Nothing and Justice. The symbolism of Perdita, Hermione's grace, and Autolycus' humour show aspects of brightness, such as love unchangeable in distress, purity and sincerity of human nature, and a firm determination to overcome human vices.

In this play, Shakespeare shows the most malicious mind and despicable deeds, and at the same time he skillfully describes the most graceful.

Studies in the Refraction Found in New Testament Translations

Kunio KATO

Presupposing the necessity of thorough study of the Old Testament, the writer tries to find 'refraction' in such as Latin, French, German, and English.

Then reading through the Syriac Version, (the Peshitta,) the writer

正 誤 表

論文名 「The Winter's Tale」の「明」「暗」

頁	行数	誤	正
207	13	The Writer's Tale	The Winter's Tale
208	29	The Writer's Tale	The Winter's Tale
212	26	隨 落	墮 落
218	20	隨 落	墮 落
224	15	隅 意	寓 意
227	1	隅 意	寓 意
228	11	The Winte's Tale	The Winter's Tale
228	22	隅 意	偶 意

(高橋)